講義

地域支援の実際 支援の実践的な枠組みと記録 講義の内容

- 1. はじめに(基礎編の振り返り)
- 2. サービス提供プロセスと計画等のつながり
- 3. 地域生活支援の枠組み
- 4. まとめ

1 2

1. はじめに (基礎編の振り返り)

:自宅での生活の女に 日中活動権保 生活リズム・外に出る・ 零年以外の人と話す 復職・新規約労支援 就労総務支援 職業準備性向上: 医学的安定・生活リズム・通勤・ 作力・懇敬・自己理解・対入関係・周囲 入院中: 医療・リハビリ 身の回りの白立 介護保険:デイケア・デイサービス・訪問看 一般雇用 降害者雇用 陸海福祉:生活介護・地域活動支援センター・就労組続支援B型・就労将デ支援・移動支援等 : 特別子会社 - 就労組続を 援A型 等 就労支援機関: 地域障害者職業センター 就業・生活支援センター ハローワーク等 週職後: 働けない(傷病手当金受給・症状固定前)→受給延長届(最長3年間) 働ける→求理登録→ 雇用保険基本手当 症 白船責保険後避路事等級共定 任務保険金額実定 労災保険後通路事等級共定 労災保険後通路事等級共定 労災保険を選び、持金(8-14級) 医療費:アフターケア医療 事交故通 所得:休棄(補價)給付 医療:療養(補價)給付 労災 施売・赤坂(明明)和刊 所得・傷病于当会(健発のみ)国保は無)既21年半 医療・健康経験(療験給付) 6か月・精神機)書音保健細計手帳 通院接筆費:自立支援接筆 6か月:生命保険 病気 共通制度 1年半: 障害年金申請 基礎編「高次脳機能障害者 への相談支援」 資料

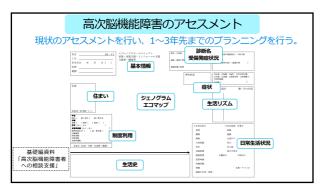
3 4

高次脳機能障害者への相談支援を行う際に必要な情報収集を行い、アセスメントを行っていく。その際には「基本情報」「診断名・受傷発症状況」「症状」「生活リズム」「日常生活状況」「住まい」、制度利用」「生活史」を中心に確認するとともに、本人の高次脳機能障害の症状が生活にどのような影響を及ぼすのか、症状に本人はどの程度気づいているのか、就労を希望している場合には仕事に就く上での準備が整っているのか、を確認することがポイントとなる。

基礎編資料「高次脳機能障害者への相談支援」

一人ひとりのプロフィールを描く (アセスメント)
本人の現状認識
本人の希望
利用の目的
現在の状況
・高次解機能響の主症状
・認知・機能レベル
・生活状況
・生活状況
・生活状況
・生活状況
・強病域
・高次感機能障害以外の障害や疾病
・周次感機能障害以外の障害や疾病
・調味・関心
・教育歴
・職歴
・教育歴
・職歴
・機材サービス歴

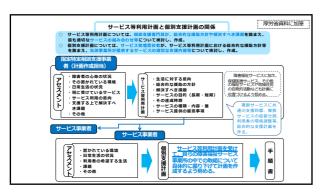
5 6



2. サービス提供プロセスと計画等のつながり

7

8

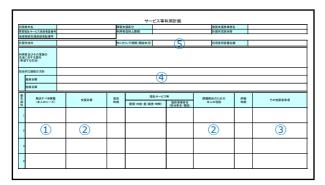


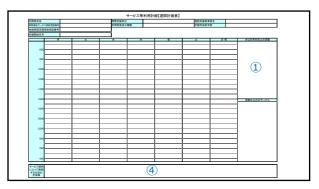
サービス等利用計画作成上の留意点 【備えるべき特徴】 …… ----【作成のポイント】 1. エンパワメントの視点が入っているか 1. 自立支援計画であること 2. 総合支援計画であること 3. 将来計画であること 2. アドボカシーの視点が入っているか 3. トータルな生活を支援する計画となって 4. ライフステージを通した いるか 一貫した支援計画であること 5. 不足するサービス・資源を 4. 連携・チーム計画となっているか 7. 不足するサービス・資源を 考える契機であること
 7. 中立・公正な計画となっているか
 7. 中立・公正な計画となっているか
 7. 中立・公正な計画となっているか
 7. 中立・公正な計画となっているか
 7. 中立・公正な計画となっているか こと 8. 生活の質を向上させる計画となっているか 日本相談支援専門員協会 サービス等利用計画作成サポートブック … 高次脳機能障害の特性等への留意

9 10

高次脳機能障害の方のサービス等利用計画作成上の留意点
① 生活全般にわたるアセスメントにより、本人のニーズ(生活課題)を
整理する一方、障害特性に起因するものに特に着目する。
注意障害、記憶障害、遂行障害が日常生活にどのように影響するか
社会的行動障害の状況や対応方法
② 生活全般にわたる総合支援計画であることを目指す一方、本人の障害
認識を踏まえ、訓練系サービスの利用が必要な点を明確にする。
自立訓練や就労移行支援を提供する事業所との連携がスムーズに
③ 他のサービス利用に際して、障害特性上の留意点を明記する。
関係者の一致した対応、支援の枠組みづくりを促す
④ 本人が希望する生活に向けたステップであることを明記する。
支援プロセスへの本人や関係者の合意を促す
⑤ 訓練系サービスのモニタリングについて、頻度の設定に留意する。
訓練場面の見学等を通じて、本人理解を深める

11 12





指定特定相談支援事業者(計画作成担当)及び障害児相談支援事業者と 障害福祉サービス事業者の関係

※点線枠部分は、必要に より実施

13 14

サービス等利用計画から個別支援計画へのつながり と高次脳機能障害への留意点

- ① サービス等利用計画に基づいて関係者内の役割分担がなされ、事業所等でサービスが提供される。 サービス担当者会議の活用(障害特性や留意事項の確認など)
- ② サービス提供事業所では、個別支援計画が作成される。サービス等利用計画中の「総合的な援助の 方針」を踏まえるなど、両計画の整合性を保つこと、また事業所内での職員間の支援の一貫性を保 つことが重視される。

関係者が本人に一致した関わりをする→効果的な支援 「リスクマネジメント」「エンパワメントの視点」「ストレングスの 活用」のパランス

③ 提供するサービス内容によって、3か月~6か月ごとの個別支援計画の更新、そのためのモニタリングが求められる。

スモールステップの重視

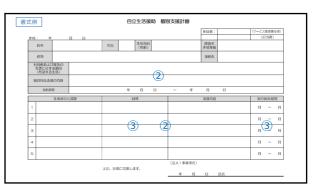
具体的な支援目標設定→モニタリングやフィードバックに有効

「手順書」の作成・見直し

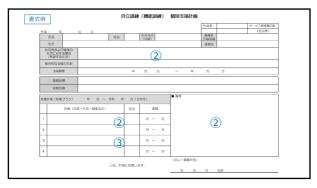
15 16

サービス担当者会議の開催について

- 1.参加者
 - 本人、家族、サービス提供事業者、計画相談支援事業者 必要に応じて、行政機関、かかりつけ医療機関(ケースワーカー)、 大家さん、 知人、職場の上司、成年後見人 など
- 2. 準備するもの
 - サービス等利用計画案、検討課題に応じた資料 など
- 3. 進行例
 - ① (初参加者の) 自己紹介 ②本人が希望する生活の確認と支援の経緯の共有 ③計画案の確認と役割分担 ④事業者との確認 (特に障害特性への配慮について) ⑤モニタリングや次回会議の確認
- 4. その他
 - 検討課題に応じて、主任相談支援専門員(基幹相談支援センター)や高次脳機能 障害支援コーディネーター(高次脳機能障害支援拠点機関)の同席を考慮する。



17 18



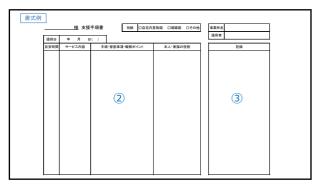
個別支援計画から手順書へのつながり

① 個別支援計画に基づいて実際に支援・サービス提供が行われるが、支援者によって対応が変わらないよう、必要に応じて手順書を作成する。

② 手順書は、具体的な支援内容が実施する順にまとめたもので、支援者が交代しても本人に同じように働きかけるごとができる。また、本人が見通しを持つことができ、安心感にもつながる。

③ 手順書の内容に沿って、支援結果を記録することで、支援内容のモニタリングに役立つばかりでなく、本人へのフィードバックがしやすくなる。

19 20



記録について

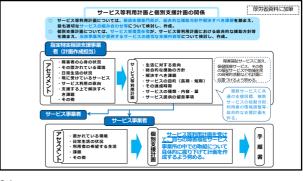
① サービス等利用計画、個別支援計画にも「記録」は必要不可欠

② 記録書式は事業等に応じて様々であるが、支援計画中の支援目標・支援内容に対応していると、モニタリングの際にポイントが明確となり、フィードバックにも活用しやすい

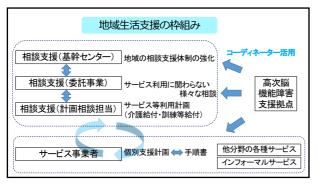
③ 専用システムを活用することも多く、必要に応じて、統一したキーワードを盛り込むことで、検索しやすくもなる。

21 22

3. 地域生活支援の枠組み



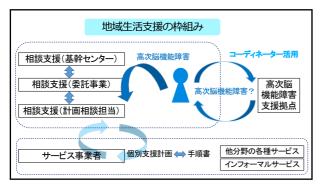
23 24



「一次キャッチ」のポイント

- 外傷性脳損傷 (交通事故) や脳血管障害のエピソード
- 高次脳機能障害の特性が見受けられる 注意障害、記憶障害、遂行機能障害 社会的行動障害
- ・本人に自覚はないが、家族や職場関係者が困っている (「性格が変わった」「別人のように・・・」)
- 精神科にかかって投薬しているが、何かしっくりこない など
- *高次脳機能障害支援モデル事業 2001年 (平成13年) \sim 知らないまま? *他の障害の特性との重複、類似

25 26



ライフステージの視点

・高次脳機能障害は、成人のイメージが強い

「高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業」

- → 生産年齢層(15歳以上65歳未満)が多い印象
- → 発症前にいかに戻るかというイメージ
- → 治療〜リハ〜生活訓練〜就労支援・・・

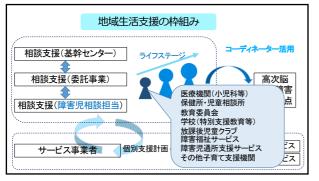
・ただ、例えば交通事故に遭う可能性は子どもでも高齢者でもある

【子ども】 親の養育観の理解、発達段階に即した支援、 療育・教育分野との連携(大人になったら)

【高齢者】 症状の自覚の有無、家族関係、 地域包括 C や介護保険事業者との連携

◎ 日頃の連携基盤が前提→困難事例のみの連携はあり得ない

27 28



まとめ

- ▶高次脳機能障害の特性や支援上必要な配慮を、支援者間、事業所間でどのように共有するか、がポイント
- ▶サービス利用に関する枠組み、地域生活支援の枠組みを活用しながら共有し、実践につなける
- ▶高次脳機能障害支援拠点の活用が重要
- ▶「掘り起こし」や「ライフステージ」の視点も重要
- * 特に、「学齢児ならでは」の関係者との連携に留意

29 30

② 厚生労働科学研究:高次振機能陶書の陶書特性に応じた支援者養成研修カリキュラム及びテキストの開発のための研究班